



館長だより

山形県産業科学館

令和 6 年 1 0 月 6 日(日)

発行 館長 加藤 智 一

私は蚊に刺されやすい

巷ではすっかり秋の気配というのに、いつの間にか蚊に刺されているのは私の右肘。そして左足の太もも内側。蚊の活動期間は7月から9月だと聞いていましたが、調べてみると4月下旬から11月下旬まで結構活動期間が長いことがわかりました。温暖化の影響もあるのかなと、さらに調べてみると、意外なことに、蚊が活発に活動するのは、25℃から30℃ということで、35℃を超える猛暑日はむしろ活動が弱まって、刺されにくくなる可能性があるのだそうです。今の時期、最高気温で25℃くらいだと思いますので、蚊はむしろそんなに活発な時期ではないはずなのですが、なぜ私に寄ってくるのでしょうか。勿論、蚊にとって魅力的な他の要因があるからですね。振り返ってみると思い当たる最大の理由は、二酸化炭素排出量（地球温暖化防止活動の敵か私は）。炭酸が入っているものを飲むと、蚊のターゲットとなる二酸化炭素が出やすくなります。仕事帰りにあける缶ビールの「プシュ」が良くないということでしょうか。さらに、血液型にも刺されやすい順番があるのだとか。1位O型、2位B型、3位AB型だそうで、私はO型ときたもんだ。他にも、汗をかきやすい人（ズバリ）、体温が36℃台後半の人（これは違う）なんかも刺されやすい人なのだそうです。汗をかきやすいとか、体温がちっと高めとかなら、なんとなく理由も分かりますが、血液型O型というのはちょっと納得いかない。O型の人が発する何らかの成分が蚊を引きつけやすいということなのでしょうか。

そもそもなぜ蚊は血を欲するのでしょうか。ふだんから人などの動物の血を吸っているわけではないそうです。血を吸うのは、卵を産む前のメスだけ。普段の主食は花のみつや草の汁。蚊はその糖分を栄養源にして生活しています。けれども、メスが卵を産むには、たんぱく質などの栄養が足りません。そこでメスの蚊は、交尾後に動物の血を吸って、たんぱく質などを体内に取り入れるという訳です。しかも蚊は、刺すと同時にヒスタミンを血管内に注入する事で血管を拡張し、効率的に血を吸いやすくしていると考えられています。また蚊の唾液には、痒みを発生させるのに十分な量のヒスタミンを含んでいます。体内のヒスタミンはマスト細胞という炎症や

アレルギーに関与する免疫細胞に貯蔵されており、このマスト細胞が唾液中の痒みメディエーターによって直接的、あるいは間接的に刺激され、ヒスタミンを放出するという仕組みになっているのだそうです。

因みに、蚊に刺されて大きくて硬い隆起ができる原因は、蚊の唾液成分に対する異常なアレルギー反応だそうです。蚊が吸血する際に分泌した唾液の中には、麻酔成分や凝固しない成分も含まれています。体質によってはこれらの成分に過剰反応を起こし、刺された部位が水ぶくれになったり硬く腫れたりすることがあります。



オオキンケイギク

オオキンケイギクは「外来生物法」により生きのまま移動させることを禁止されている植物です。自宅の庭などで見つけた場合は、根から引き抜いたあと2〜3日天日干しにして枯死させる必要があります。しっかりと枯死させたあと、各自自治体の指定する分別に従って処分しなければなりません。そんな「オオキンケイギク」の花言葉は「きらびやか」「いつも明るく」です。人体を害する毒性もありません。そのため駆除の際に摘み取った花や葉は食べられる野草となっています。春菊のようなキク科特有の風味が味わえます。すっかり日本の風土に馴染んでいて、私は「在来」だと思っていました。

好き好んで日本の大地に根を下ろした訳ではないでしょうに。なんと悲しい事でしょう



一切衆生悉有仏性